

平成26年度「北の文脈文学講座」

今年度も5月から「北の文脈文学講座」が開講しました。

この講座は、展示資料をより深く楽しみながら鑑賞してもらうために、毎月第3土曜日に開催しています。平成24年から始まった文学講座は、今年で3年目を迎えました。

5月の講座では、高木恭造の代表作『まるめろ』の初版本について深く説明され、6月の講座では、井上靖の「弘前の思い出」、安岡章太郎の弘前での小学校時代など、弘前が描かれた作品を中心に紹介されました。7月の講座では、太宰治の自筆ノートや、弘前での下宿生活のエピソードを交え、太宰治の高校時代の文学活動が語られました。9月の講座では、劇作家として活躍した久藤達郎の戯曲集を取り上げ、その作品の魅力を紹介しました。



5月17日 「高木恭造の『津軽方言詩まるめろ』初版本」講師：舘田勝弘（企画研究専門官）

6月21日 「井上靖・安岡章太郎が描いた弘前」講師：齋藤三千政さん（郷土文学研究家）

7月19日 「太宰治の高校生活」講師：鎌田紳爾さん（音楽家・文学者）

9月20日 『久藤達郎戯曲集』の魅力」講師：舘田勝弘

10月から12月の講座も、
どうぞ皆様のご参加をお待ちしています!!

— 今後のスケジュール —

10月18日（土）「高木恭造の詩と小説」

講師：舘田勝弘

11月15日（土）「鎌田慧の『北へちいさな旅』」

講師：齋藤三千政さん（郷土文学研究家）

12月20日（土）「工藤正廣の翻訳
『ドクトル・ジヴァゴ』」

講師：竹森茂裕さん（弘前ペンクラブ）

【午後2時～3時 場所：郷土文学館2階ラウンジ】

受講無料（事前申込不要） 郷土文学館入館料が必要です。

（一般100円/小中学生50円）

※あおもり県民カレッジ単位認定講座です。



北の文脈ニュース第72号 発行：平成26年10月1日 編集/発行：弘前市立郷土文学館

〒036-8356 青森県弘前市下白銀町2-1 TEL0172-37-5505 <http://hi-it.net/~bungaku/>

北の文脈ニュース 第72号

Kitano bunmyaku news

第38回企画展記念講演会が開催される

「まるめろの在る椅子」 講師：やまだ しょう 山田 尚氏

平成26年8月16日（土）弘前図書館2階視聴覚室



講演中の山田氏

第38回企画展『「まるめろ」の飛翔 高木恭造展』の記念講演会が、8月16日、弘前市立図書館2階視聴覚室で開かれました。

講師の山田尚氏は、高木恭造の弟子で高木文学の研究者でもあり、郷土文学館の専門員を勤められました。

当日は、山田氏本人が、『まるめろ』を情感込めて朗読し、一作読み終えるごとに作品を解説し、思い出などを語りました。

「すかんこの花」では、ゴミをかぶっても生きていかなければならないという人生訓が読み取れます。「漁師」は、一行詩ながら、遠近法が巧みに読み込まれています。「鼻ごと殴いて…」（妻をなぐって）という衝撃的な書き出しで始まる「冬の月」は、愛憎は表裏一体であるという愛情を描かれています。これは、ジェームズ・カーカップと中野道雄氏によって、初めて英訳された詩で、英語にするには大変苦労したと述べ、英語での朗読もされました。

「高木恭造は、方言詩は、意味ではなく、言葉の響きに重点を置く。それが、人の心を打つ、と唱えていた。」と語りました。

この日は『まるめろ』に収められている18編の詩が朗読され、約45名の聴衆を魅了しました。



講演会の中で、山田氏は、『津軽方言詩集 まるめろ』は昭和6年に出版されたが、初版は100冊と、わずかだったため、幻の詩集と言われた。」と語っています。一昨年、当文学館では、高木恭造の生誕111年に合わせるかのように初版本を入手することができました。第38回企画展『「まるめろ」の飛翔 高木恭造展』で展示していますので、ぜひご覧になってください。



▲『「まるめろ」の飛翔 高木恭造展』

『津軽方言詩集 まるめろ』
『北』編集所 昭和6年10月5日



第38回企画展
『「まるめろ」の飛翔 高木恭造展』は
平成27年1月3日まで開催しています！

新資料紹介

平成26年7月5日に購入した福士幸次郎詩幅、佐藤紅緑・サトウハチロー父子歌幅を紹介します。

◆福士幸次郎詩幅

墨筆

本紙 127×28 cm 掛軸 200×46 cm

「情熱とは万^{ぼんだ}朶の火の花

拙詩の一句 福士幸次郎

拙詩の一句とあるが、詩集『展望』に所収されている「感激」という詩に

「一感激とは萬朶の火の花だよ。」

という類似の一節がある。

幸次郎は、かねてから交流のあった板画家の棟方志功を訪ねた際、「何か字を書こう」と言って

「為棟方志功君、感激とは万朶の火華」

と一筆したためた。棟方は、この書をととても好んでいた、というエピソードがある。

幸次郎は、棟方が尊敬する文学者であり、この詩幅は、文言に多少の違いはあるものの、棟方との交流にも思いを馳せることができる。

(参考文献：棟方志功著『板極道』 中央公論社刊 昭和39年)

◆佐藤紅緑・サトウハチロー父子歌幅

(上)佐藤紅緑色紙 墨筆 20.3×17.5 cm

「伊太利紀行

牛と人と水平線を耕す 紅緑

紅緑は、大正12年、外務省囑託として映画研究のためヨーロッパへ外遊している。その時、訪れたイタリアの情景を詠んだものと思われる。

(下)サトウハチロー短冊 墨筆 36×7.5 cm

「雨には母のまつ毛がある

わたしをさとすまつ毛がある

サトウハチロー

ハチローの詩「雨とお母さん」に

やさしい雨には母さんのまつ毛がある

わたしをさとすときににぬれているまつ毛がある

という一節があり、それに類似する。

紅緑、ハチロー親子の色紙、短冊が一つの書幅として表装されている。

色紙、短冊それぞれ別の作品だが、親子の作品が一つの表装上に相見ると

というのは珍しい。

◀佐藤紅緑(上)サトウハチロー(下)
父子歌幅

スポット企画展「太宰治の高校生活」終了

去る7月1日から8月31日まで開催されました太宰治の高校生活展に、ご来場いただき誠にありがとうございました。

金木町(現五所川原市)出身の太宰治こと津島修治は、青森中学を4年で修了し、官立弘前高等学校に進学します。学校にほど近い、親戚である藤田家に下宿しながら3年間の弘前で過ごしました。今回の展示では、津島修治が「太宰」を名乗る前のペンネームで発表されている高校時代の作品や、高校時代に使用した辞書、下宿先で撮られた写真、実家から送られた手紙など太宰の高校時代に関連した様々な資料を紹介しました。特に今回は、当時下宿先で撮られたまだあどけなさが残る太宰の写真とともに、それらの写真を撮った下宿先の長男、本太郎氏の当時の日記もご遺族のご厚志で展示することができました。日記には太宰がやってきた日のことや小説を読んでもらったこと、一緒に観桜会を見に行ったりチェスをやって遊んだことなどが記され、当時の太宰の生活の一端を知る貴重な資料であります。

来館者の中には、町に貼られたポスターを見て興味を持って来館してくださった方や、偶然来館された太宰ファンのお客様なども多く、太宰人気は未だ健在です。



藤田本太郎氏の当時の日記

スポット企画展「久藤達郎展」開催中！！ 期間：平成26年9月1日～11月30日

久藤達郎(本名 工藤達郎)は、教職にある傍ら、劇作家として、小説家として、また高校演劇の指導者として活躍した人です。東津軽郡内真部村(現青森市)に生まれ、西津軽郡鰺ヶ沢町で育ち、青森県師範学校を卒業後、西津軽郡の中村尋常小学校に勤務しました。この頃『東奥日報』にペンネーム淀源三(詩)や久藤達(小説)で作品を発表しました。小説家を目指し上京、都内の学校で教員をしながら法政大学へ通い、中山研究所の映画シナリオの募集に応募・入選した後、戯曲を書き始めます。

昭和18(1943)年、処女作「たらちね海」で国民演劇脚本情報局総裁賞を受賞。「たらちね海」は、邦楽座で上演、里見弴演出、宇野重吉・千秋実が主演。また、大映で「海を呼ぶ声」となって映画化もされました。翌年、応召して入隊。除隊後、県立弘前高等女学校(現弘前中央高校)の教諭として着任しました。他にも代表作として「東風の歌」「明治の学校」「林檎事始」「宮沢賢治伝」民話劇「シガマの嫁コ」など津軽の方言を芝居語として定着されるなど風土に根ざした数多くの作品を発表しました。

生誕100年を迎える久藤達郎の軌跡を紹介しております。多くの方のご来館をお待ちしております。



▲福士幸次郎書

スポット企画展「久藤達郎展」開催中

(9月1日～11月30日)